

国際交流の展望

二〇一一年四月二一日

パネリスト

磯前 順一

猪木 武徳

テモテ・カーン

佐野真由子

細川 周平

山田 奨治

劉 建輝

司会

荒木 浩

瀧井 皆様、お待ちせいたしました。それでは、第一七七回の日文研木曜セミナーを開催したいと思います。

今月と来月はちょっと変則的でありまして、今まで二回にわたって日文研二五年史企画ということで座談会を開催してまいりましたけれども、これから四月と五月の木曜セミナーの場をおかりしまして、日文研二五年史座談会を引き続き行っていききたいと思います。

そういうことで、本日は日文研二五年史座談会のパートⅢということで、「国際交流の展望」と題して開催したいと思います。時間のほうも、いつもでしたら一時間半ですけれども、きょうは二時間、一八時半までたっぷりとお話を聞きたいと思います。

これまでの過去二回は、古株の先生がたくさんいらっしやったので、二時間でも足らなかったのですが、本日は古株の中では安田先生が残念ながら急にお仕事でご欠席になってしまっていて、比較的フレッシュな顔触れとなりました。そういうこともありまして、過去を振り返って懐古するというよりも、むしろ未来志向の話がいろいろ聞けるのではないかと楽しみにしております。

では、本日の座談会自体の司会は荒木浩先生にお願いしておりますので、荒木先生にバトンタッチしたいと思います。では、よろしくお願いします。

荒木 よろしく願います。では、比較的フレッシュなというご指摘もありましたので、活気に満ちた座談会になればと思っております。

今、瀧井先生のほうからご紹介がありましたように、二五年史というのをつくっております。資料編と物語編とに分かれていますけれども、資料編というのは主にいろんな情報を盛り込んだ資料集で、その資料を読んだ方々にそれぞれの日文研のイメージを抱いていただくという側面を持っているものであります。その第二章に「研究活動二」というのがございまして、そこに国際研究集会や海外活動というものが載せられる予定になっております。そして、第三章が「研究協力活動」ということで、シンポジウムをはじめとする日文研のいわゆる研究協力活動について記述される。二五年史にはほかにもたくさん、今日の話に関係することはあるのですけれども、資料編でいいますと、第二章、第三章に関係する重要な日文研の活動

が、本日のテーマの国際交流の諸相ということになります。日文研というのは国際的、学際的、総合的というのが一つの売り文句だとされています。私はまだ日文研ビギナーですので聞きかじりですけれども、そういう形で日文研の方針が展開している中で、筆頭に来る国際交流ということについて、今回は座談会という形式でいろんな情報をうかがい、交換して、先生方から提言や批判をしていただくという集まりであります。

パートⅢとしたのは、瀧井先生からもご紹介がありましたように、今年に入って二月一六日でしたか、創設期について、この壇上で先生方に集まっていただいて座談会を行っております。また三月一七日に、今度は共同研究にテーマを定め、やはり同じように座談会をしていただきました。今回は木曜セミナーという形で、初めての公開形式での座談会ということになります。さらに言いますと、昨年一二月に井上先生、早川先生、白幡先生の三人のいわば古株の先生方に、エトレの小野さんのほうから、インタビュー形式といいますが、座談会形式といいますが、それも共同研究ということをして座談会が行われています。そういう意味で言いますと、ゼロ回を合わせて四回目、次の資料をめぐる座談会で合計五回という、非常にたくさんのお話をいただくことになっております。

話をする都合上、共同研究とか、創設とか、国際交流とか、あるいは資料というふうに、少し細切れにしてありますけれども、これまでの座談会を伺っていても、あるいは資料などを読ませていただいても、非常にそれらは相互密接に関係していることであります。主に今回は国際交流に特化した形で話をさせていただきますが、問題をゆるやかに広く捉えていただいて、フロアにいる先生方からお感じになることなどを自由闊達にお問いかけ下さい。ステージの先生方のお話への疑問あるいは提言、それから賛成など、積極的なご発言をいただければという

ふうに思っております。

先ほども瀧井先生からテーマの紹介がありましたが、「展望」という言葉のその意味を辞書で確認してからタイトルをつけたのですけれども、「振り返りつつ前を見る」というのが「展望」の語義であるようです。本日の討論は、どちらかというと前傾しながら、前を見ながら進めたいと思います。数多い先生方に今日はお集まりいただいております。それぞれ多様な形で国際交流の経験を積んでいらっしゃいますし、所長、海外研究交流室長もいらっしゃいますので、日文研としてのオフィシャルな見解もあります。それから、海外で教えられたり、研究をなさったり、数多くのシンポジウムに参加されたり、あるいはご自身が海外で研究経験を積まれたりと、いろんな形で国際交流というキーワードのもとに仕事をなさっている先生方がおられます。ある種、立場のある先生はそれを踏まえながら、そしてまた先を見ながらということですが、少し場がほぐれましたら、もうざっくりばらんに、私としては、どちらかというと自慢話とか、あるいはとんでもない失敗の話なんかも入れていただくとありがたいと思います。一回全員にお話しいただきますが、その後また活発に、これも言いたい、あれも言いたいということをおっしゃっていただければというふうに思っております。

大変恐縮ですけれども、日文研の主要な大事な柱である国際交流について、猪木所長のほうからまず口切りでお話しただけだと思います。

猪木 最後かなと思っていたんですけれども。

フレッシュな顔ぶれとおっしゃって、皆さんが私の顔をごらんになりましたね。確かに私は「新鮮」ではないかもしれませんが、フレッシュには「生意気」という意味もあるんですね。だからフレッシュというのは、ここにいらっしゃる方はみんな生意気な方でもあるのです。

国際交流というふうに銘打たれていますけれども、これは非常に広い意味ですよ。何を交流するかということばかり言っていますけれども、要するに国と国との間でやりとりをするという非常に広い意味になっています。日文研で海外研究交流室等が中心になって研究協力委員会等でいろいろ議論をして企画を立てるというような、そういう意味での日文研の活動としては、研究協力という言葉を使いますね。

私は、研究協力という言葉は、創設の時代から大変重い意味を持たされた、背負われた言葉であるということを実は日文研の創設準備室の議事録、議事要旨ですか、私はドーアさんに四年か五年前でしたか、海外研究交流顧問をお願いしたときに読みました。というのは、ドーアさんがこの研究所設立の経緯なり趣旨をもうちょっと私は詳しく知りたいとおっしゃったので、設立準備委員会の議事要旨を読んだときに、こういうことが書いてありました。

第一ラウンドの時間は何分ぐらいですか。

荒木 全く決まっています。

猪木 そういうことはあり得ないので。一〇分ぐらいで収めます。

その中でこういうやりとりがあるのです。文部省のお役人さんと梅原先生、そしてこちらの準備室には園田さんが次長をされていて、黒田英雄さんという方が事務的なヘッドをされていたのですが、「センター」という名前は意味があまりはつきりしない」「横文字で軽過ぎる」「研究所としてはどうか」というような議論があったときに、「いや、研究所としては少しくくない。この構想の基本概念というのは研究と研究協力だ」と。研究協力というのは少し具体的に申しますと、主に海外の研究者への情報の提供、資料を収集し整理し、日本研究に関する情報を提供し、そして学術上のサポートをする機能ですよ。その研究協力というのが、実は

研究と等価であるというふうに言っているんですね。この二つの重要なファンクションを、センターという言葉だとその意味が失われないけれども、研究所としてしまうと、研究協力という概念、もともとのコンセプトの中にあった二つの柱の重要な部分が欠落してしまうというやりとりがあります。

これは、一九八二〜一九八三年あたりから、桑原先生、梅原先生、梅棹先生等々が日本研究の中心的な施設をつくるというときに、どの時点でこの考えが明確に出てきたのかというのはちょっと、その議事録は創設準備委員会ができてからのものですからよくわかりませんが、とにかく情報提供と海外の日本研究者の要請に応じて、自立した研究者への研究を側面からサポートするという機能が非常に重視された研究所としてできたということですね。これを私は、着眼点として、他の研究所と日文研を区別する非常に重要な点だというふうに思います。

ですから、私が所長になりましたときに、日文研は決して文化交流の機関でもないし、個人の研究者の寄り合い所帯でもない、学術外交のための機関だという意味で、学術外交という言葉を使ったのですけれども、趣旨、考え方は基本的に同じだというふうに思います。国際交流というふうに言くと、ちょっとあいまいさが増えて、日文研の柱の一つの輪郭がはっきりしなくなる。もちろん実際は人と人とが交流し、その人と物、書物とか映像、文書資料などが前提としてあるわけですから、具体的には交流という言葉は不適切ではないと思うのですけれども。ただ元来、研究協力という言葉が、共同研究と並んで同じウエートを持った。そして海外の研究者の独立した研究、自発的な研究に対するサポート機関だということが強調されていたということです。この点は、私自身もとすれば忘れてしまう。

そうした議論の中で、外国人を客員として呼ぶときに、日本語を話せない人でもいい。しか

し、日本語が読める人じゃないとだめだという意見も出ております。ですから、それはこれから後で皆さんがいろいろ討論なさるときに、失敗談も含めて具体的な研究協力のコンセプトが現実にはどういう形で変容したかというようなことを振り返るのも大事だと思いますので、私の発言はこの程度にとどめておきます。

個人研究、研究者への資金援助でもない、そしてむしろ書かれたもの、映像的なものを通して、外国の日本研究者自身の自発的な研究テーマを推進するために側面からサポートする機関であるということが、この研究所の特徴であり、重要なおそらく忘れてはならない点じゃないかなというふうに思います。

第一ラウンドはその程度にいたします。

荒木 ありがとうございます。

今、一つ問題提起がされましたので、後で議論の重要な柱にしたいと思います。

次に、私が赴任してまもなく、一通の六月三日付の文書というのをいただきました。それは日文研が海外で行うシンポジウムの企画募集という書類で、海外研究交流室から来たものでした。日文研には海外シンポジウムというのと日本研究会というのと海外研究交流シンポジウムという研究交流のカテゴリがあり、さらに、海外ネットワーク形成事業というのもあります。が、いただいたペーパーはその企画の立て方とか、あるいはそれをどう推進していくのかについての呼びかけの文書でありました。

同じように、一月でしたか、今後三年間の海外研究交流室の構想する展開についての詳細な文書をいただいて、今、日文研がイメージしている、外に出ていくほうの学術外交のことがわかりかけているのですけれども。もう少し詳しくそのことも聞きたいということもあります。

ので、続きまして、現在室長をしておられる山田先生のほうから、ざっくりばらんに結構ですけど、ご自身の体験でもよろしいですし、あるいは日文研の方針でも結構ですが、まずお話しただけだと思います。

山田 ちょっと予想していたのと違う振られ方をしたので、どうしましょうか。今、私は海外研究交流室長をしておるのですけれども、今どういう方針でやっていますというような話よりは、私自身が感じていること、思っていることを、たぶんそんなに発言の時間はないでしょうから、言いたいなと思うんですけれども。

先ほど所長が、このセンターの目標、目的、存在する理由に二つあって、研究と研究協力という二本柱があるということでした。ですが、例えば我々、専任のスタッフを選ぶときは、主として研究の能力を見るわけですね。研究の能力というのは、それを活かす方法はある程度ありますけれども、研究協力の能力というのはなかなかはかりがたいものがあるって、どのくらい社交的かとか、例えばホスピタリティーがあるかとか、そんなことは実際に働いてみてもらわないとわからないというところがあって、センターの二本柱をうまく満たすように人員を配置する難しさを私は感じています。

つまり、我々は基本的には研究者でありますから、やっぱり自分の研究をしたいというのがまずあるんですね。そうになると、研究協力というミッションが研究の時間を割くものというふうに、ついついとそれがちになってしまふ。その辺を各スタッフの人たちがどうやって自分の中で折り合いをつけていけばいいのかというのを、皆さん、もうちょっと考えていきましょよということ呼びかけたいと思っています。それが第一点ですね。

もう一つは、これも現役の室長としての意見、考えなのですけれども、外国から来られてい

る客員の先生方に対するサービスのあり方、サービス水準に対する感度がちょっとどうも鈍っているような気がします、正直申し上げまして。

例えば、そこまでやる必要はないとか、あるいは、自分たちが海外へ行ったときにそんなことはしてもらえないといった発言を同僚諸兄からよく聞くのですけれども、このセンターをつくったときの理想というのは、世界最高の研究所をつくるということではなかったのか。その最初の理想というのは、もう我々日常の最近の忙しさの中で埋もれてしまって、夢もどこかに消えてしまったのかと思いますぐらいです。

ですから、我々として、本当に世界最高レベルのものをづくり、提供していくんだという理想像をぜひもう一回皆さんで考えてみませんかというのが、現役室長としての二点目の提案です。こういう発言でよろしいでしょうか。

荒木 結構です。非常に今、大きな問題が提起されました。先ほどの猪木所長から出た研究協力の問題と深く関連する事柄でもあり、問いかけもありましたので、後でゆっくり議論をしたいと思います。

では続きまして、交流室長のご経験があると伺っておりますが、細川先生、よろしく願います。

細川 僕が交流室長だったのは二〇〇七年から二〇〇九年にかけて、二年です。そのときには現在とは組織も少し違っていて、同時に研究協力委員長をやっておりました。

私のいた間では、それまでのアジア太平洋ということで企画されていた三年計画、オーストラリア、シンガポール、中国、これに続く新機軸を打ち出そうということで、僕が就任する前の年だったかに、それまであまり日本研究が盛んでなかった三つの国を選んで回っていろいろと

いう新しい行脚のスタイルを、僕ではなくて前の方が打ち出して、それにのっとって、エジプト、ロシア、ブラジルという三ヶ国に続けて行きました。そのうちのエジプトには不参加で、ロシアとブラジルに特に深くかかりました。

ブラジルに関しては非常に長い付き合いがありますし、向こうのスタッフとも一〇年以上の付き合いがあったわけですが、ロシアというのは、そのシンポジウムがあると決まってから初めて話すような、コミュニケーションをするような人たちばかりで、ともかく初めから大変、行ったこともない国でしたから、こちらからの勘がつかめないというところがあって、なかなか苦労した覚えがあります。

また、どの時期までだったか、交流室には奥野さんというベテランの女性がいまして、その室長になっても、彼女の言うことを聞いていれば大体うまくいくという、信頼できる人がいて、忠告を受けておりました。そういう二年でありました。

また、海外シンポのほかに、フランスにあります欧州日本学研究所というのがアルザスにあります。これはアルザス、ドイツとフランスの国境付近にある非常に戦略的な場所で、ヨーロッパの中央であるという自覚が強い州、県ですけれども、その日本学研究所とも、猪木さんが室長の時代に一度行って、それ以降かなり親交を深めて、僕が室長の時代の一つセミナーをやったことがあります。

この日文研では、中国、韓国の方が非常に多い。悪く言えば黙っていてもシンポジウムが、どんどんセミナーができてしまう、人の交流がある、そういう国があります。また、北米やオーストラリアとも、まさにどんどん、これまでの二〇年間の下地があると思いますけれども、僕がかかわった国々は比較的そういった過去がなく、人の脈を開いていくというような

ところで、かなりいろいろな力を果たしたつもりです。

どうすればよかったとか、いろいろ、今のお二方の話に付け足して言えば、最初、猪木さんが交流というのは人と人の付き合いというふうなことをおっしゃいましたが、そういった点をもっと出せるような組織にしたい。どうしても組織と組織、日文研とどこそこ大学、東洋研究所というようなところが、名目上は確かにそうやって組織され、お金もそうやって動いていくわけですが、こちらの気持ちとしては人と人で、相手の誰それがいやつだから、やつぱりここでやりたいなとか。いいやつというのは、研究的にも個人的にも、いろいろな意味で信頼でき、もっと付き合いいたいというような人との付き合い、情熱というのかな、そういうところをもっと実現できるようなことをもっとしたいですね。なると思います。かみ砕いて言うとうと、小回りが利くような体制、いろいろな形の規模、あるいは予算のつくり方、開催の仕方のものがもっともっと増えていったらよろしいかと思っています。

日文研の公式行事のほかに、半分ぐらいは公的、でも半分ぐらいはもっと私的な形で何かシンポジウム、セミナーに参加し、その人脈を広げてくるというような機会にたくさん的人的な、あるいは資金、事務的な資本をもっとかけるようにできたらいいと思います。

今はこのくらいにしておきます。

荒木 ありがとうございます。

また一つテーマが広がって、外へ出ていく対象、それから人脈、人と人という話がありましたし、そのシンポジウムの運営などについての方針や今後のあり方について、幾つか提言もあったと思います。

引き続きまして、この中では二番目にご赴任が古いのではないかと思います、劉先生。

劉 劉建輝です。二番目に古いといえますと、山田先生の次ぐらいですか。

実は私は別の意味でもうちょっと早いです。つまり、客員研究員として九三年から一年間日文研のお世話になったことがあります。そして、途中で身分が逆転して、また専任として九九年に來たわけです。

今、他の先生方から理念とか方法とか、いろいろなお話が出ましたけれども、私は、せっかくの二五年史の企画ですので、ここですこし具体的な交流史のようなものをご紹介したいと思っています。

私がかかわってきた海外交流は、特に中国を中心とするアジアの国々ですが、中国に関して言えば、先ほど海外シンポジウムの話が出ましたけれども、実は第一回は北京大学と一緒にやったのです。一九九五年でした。その前の年、九四年に京都会議というとてもない大きな国際集會が開かれ、その流れでキャラバンもやろうというような経緯があったように覚えています。そのとき、私は、まずこちらで京都會議のお手伝いをして、そして向こうにもどって、北京大学のほうでそのキャラバンの世話をさせて頂いたのです。その前にも一部交流がないわけではないが、研究協力としては、たぶんこれからはしりではないかと思っています。そしてその後、北京大学との間でかなり緊密な協力関係が築かれたと思います。

北京大学と並んで、もう一つ、協力関係上で非常に重要な拠点となったのは、北京外国語大学に設置された北京日本学研究中心という、国際交流基金が中国政府と一緒に作った研究教育組織です。ここには、日文研の先生たちがかなり早い段階からその大学院に赴き、それぞれ一年か半年間教鞭を取っていたという経緯があります。私の知っている限りでは、中西先生、芳賀先生、その後、笠谷先生、上垣外先生、白幡先生、栗山先生、稻賀先生らがみんな行ってい

たと思います。これらの先生方、教授陣が定期的に北京に行って研究中心で教えていたことは、向こうの日本研究を大変助けたというか、研究のレベルアップに非常に貢献したと思います。

今、累積的に中国からの外国人研究員が一番多いということになっていますが、実は、これもこういう先生方の努力によって出来たネットワーク、また協力関係によって生まれた実績の一つだと思います。向こうで発見した人材を日文研に呼び、その研究を助けていたのです。

ついでに申しますと、北京日本学研究中心の卒業生が、うちの総研大に、一番たくさん来ています。全部でもう六、七人ぐらいいるんじゃないですか。研究中心から総研大の博士課程に進学し、そして学位を取って学界にデビューするという形です。そういう意味で、北京日本学研究中心と日文研との協力関係は、たぶん他に例のないケースだと思います。

北京大学と北京外大以外でも、今、中国の多くの大学と交流関係が出来ています。これには、白幡先生、笠谷先生もそうですが、おそらく鈴木先生が一番多く貢献されていると思います。私が最初に鈴木先生と出会ったのは、たしか一九九一年社会科学学院で開かれた国際会議の場だったと思いますが、その時期から先生がもう頻繁に中国に行かれて、多くの大学で講演や講義をやってこられました。特にここ一〇年来、近代概念の形成という研究テーマについて、中国や韓国の学者と一緒に、例えば北京や広州、南京、ソウルなどで、ほぼ年に一回のペースで国際シンポジウムを開催してきています。そのご尽力もあって、今や中韓のほとんどの重点大学と交流、協力関係を築き上げたのです。

最後に、私自身のことです。たいへん恐縮ですが、一九九九年日文研に赴任して以来、満州研究班等を主宰したこともあって、特に前任校の北京大学と中国東北部の各大学との関係構築に留意してきました。この間、北京大学や吉林社会科学学院、東北師範大学などの機関と国際シン

ボを共催したり、「満洲」をめぐる共同研究を行ったりして、かなり緊密に付き合っています。そしてここ数年また新たに台湾との関係を意識的に築こうと努力しているところです。

すこし意外かもしれませんが、日文研と台湾は、つい最近までそれほど深い関係を持っていませんでした。いろいろな理由があって、あまり台湾の学者を日文研に呼んでいなかったのです。たしか栗山先生が一人か二人、短期訪問に呼んでいましたが、長期の客員はまったくおりませんでした。この三、四年、所長をはじめ、私たちはかなり頻繁に台湾を訪れ、中央研究院等と国際シンポも二回ほど共催しました。そして台湾からは客員研究員、来訪研究員、また大学院生も徐々に来られるようになりました。今後やはり中国大陆、台湾、そして香港などいわゆる中華圏の国と地域と広範に交流していかなければならないと思います。

このように、十数年間、さまざまな国際交流、研究協力をやってきましたが、その感想の一つとしてあえて申しますと、これは先ほど山田先生からも研究姿勢のお話が出ましたが、やはり自分の研究と研究協力をどのように両立させるかは、われわれにとっても問われる大問題だと思います。研究協力をたくさんやれば、当然、多くの時間と体力が費やされます。それでも自分の貴重な時間を割いて海外に出ていくのは、やはり相当の自己犠牲が要求されると思います。

たしか私がまだ客員の時でしたか、芳賀先生が大変な名言を吐かれたことがあります。日文研の教員はつねにパスポートをポケットに入れて、呼ばれたらいつでもすぐ海外に飛んでいかなければだめだとおっしゃったのです。むろん、現実的にさすがにそこまではなかなかできないと思いますが、ただ、ここに在籍する以上、そういう心構えがやはりある程度必要かとも思っています。自らの研究と研究協力、この車の両輪をどうバランス良く動かすのか、たいへん難しいだろうが、われわれ全員にのしかかっている重い課題ではないかと強く感じております。

すこし長くなりましたが、とりあえず以上です。

荒木 ありがとうございます。

経緯のこと、それから最後のほうでは、先ほどの山田先生のお話にあったことにもかなり絡む重要な問題が提出されました。これも後で議論しなければいけないと思います。

引き続きまして、まさに最近まで海外で実際に研究をしておられて、一番ホットな雰囲気をよくご存じな磯前先生、よろしくお願いいたします。

磯前 私はこちらとドイツで感じた話をしたいと思います。

ドイツのルール大学ボッフムというところに呼んでいただいて、一年いたんですけど、前期に所属していたのは「Dynamics of history of religion」という学際的な宗教をめぐる東アジアとヨーロッパの対話という場所で、日本で言うCOEみたいなお金をボッフム大学が取つてきて、年間一二人の宗教研究に関するフェローを東アジアとヨーロッパ、アメリカから呼ぶ、あるいはイスラムから呼ぶ。それと、ボッフムにいる教員三〇人ぐらいを合わせて四〇人ぐらいで共同研究をやるという六年ぐらいのプロジェクトで呼んでもらいました。

せっかく行ったので授業をやるのかなと思って、前期は宗教学科で授業をさせてもらったのですね。タラル・アサドとか、ガヤトリ・スピヴァクとか、日本とは全く関係ない、アメリカで非常に大きな宗教学の動きとか、宗教学を超える宗教研究の動きというのがあって、そういうものが北米でどういうふうに読まれているのかというのをドイツ人の院生と日本から来た私と一緒に読んで、どういうふうにアメリカの宗教研究を問題化していったらいいかというゼミを大学院生とやりました。

後期は、どうしてもということでした、日本研究の日本史学科で授業をやりました。学生の

反応は全然違っていました。それから、教員の反応も全然違っていたんですね。それは、私はとても一般化できるような能力はありませんので、単に個人的な経験として話すにとどめたいと思うのですけれども。

日本研究で最初に見せたのが、一九六〇年代ぐらいにつくられた「日本誕生」とかという映画だったと思うんですね。私ともう一人、ドイツ側から教員が来て、ドイツの教授の命令だということ、私は無理やりそこに組み込まれて授業をやれと言われたのです。まずその映画を見せて、彼は何と言ったかという、一九六〇年代に日本人はまだ『古事記』と『日本書紀』を信じていたと。そこに日本人が裸踊りをしていて、こういうのが真実だと。有名な映画監督も有名な俳優も出ている。そこにいるドイツ人の男の子、女の子というのは、留学した子は何人もないわけですが、ああそうかな、自分のドイツ人の先生は優秀だなんて思って聞いているわけですね。例えば、原節子という女優がいる。「ここに日本人がいる」と私が言うと、呼ばれて「ハラセツコと漢字を書いてくれ」と。「嫌だ」と言うと、今まで来ていた東大教授もやっているからおまえもやれと言われて、原節子と。途中で嫌になって拒否したのですけれども。そういう漢字を書かせる。

彼はその後、何と説明したかという、私たちドイツ人は六〇年代にはナチスの神話を信じているばかなやつは誰もいない、六〇年代には完全にゲルマン神話というのは批判していた」と。学生も、うんうんとうなずいているわけですね。「ところが、どうですか、日本人たちは。すばらしくエキゾチックで、神話を信じていますね。と同時に、エキゾチックかつ野蛮で。」私がいて、私の妻がいて、そこに韓国の友人がいて、「ねえ、そうでしょう」とか言われて、「いや、どこにそんな資料があるんですか。この映画がベストセラーになった資料はどこ

にあるのですか」と言ったら、「あなた知らないの」と言われて、「見せてください」と言ったら、彼は何も見せないで「そういうものです」とか言っていました。

それで結局、私が何といっても、そういう沈黙の共同体ができてしまうので、「そうだね」という話になって、「やっぱりドイツ人っていいよね」といって、私はその三週間目ぐらいから出席を拒否して、教えるのをやめたのです。もう、耐えられないと言って。変わったことといえ、そういうことがあるんですよ。

ある日また呼ばれて、九州大学から教授がやってくるので、ボッフム大の日本史と一緒に会議をやるからちょっと来てくれと言われて、「近世におけるダイナミックス」とか何とか。「近世って何ですか」と言ったら、ドイツ人の教授が「そんな質問をするのはやめてくれ」と言われて、「ここはそういう場じゃないだろう。日本の古文書の話をする場であって、近世を問う場じゃない」。「でも、ダイナミックスと近世というタイトルで、どう見てもダイナミックスがないんですけどね」という話をしたら、「不愉快だから、あんた、ちょっと、もういいよ」と言われて。

要するに何を言いたいかというと、つまりそういう形で日本研究とは一体どういうフレームでやっているのかという問題がすごく、私がぼっと来たときにあるんですよ。またそこに日本人の方がいる場合があるんですよ。彼らがまたその期待に応えて、一生懸命日本人を演じようとすることもある場合があるんですよ。そこに共犯関係ができてしまって、ありがたうみたいな感じで。「何でこいつがこんなことを言うんだい」といって、それから二ヶ月後ぐらいからはもうすっかり日本研究所に呼ばれないで、宗教学のほうにばかりに呼ばれているということになっちゃったんですね。

前期は宗教学をやっていて、日本をやりたい学生なども来ていましたけれども、それはあくまでも宗教という現象、レリジョンと呼ばれている概念、鈴木貞美先生が専門でもある概念が、ヨーロッパのプロテスタンティズムができてきて、それが日本に入ってきて、自己認識がプロテスタンティズムに合わる形でできてくる。そこに日本はおさまらない部分もあって、ずれも出てくるみたいな話をやっていく。

そうすると、イスラムをやっている学生とか、南米からドイツに留学している学生がやってくるわけですね。そこで南米ではこうだ、イスラムではこうだ、日本を私はやりたいんだけど、こうだと、学生の中でディスカッションができてきて、宗教というものに、みんなおんなじになっちゃうわけじゃないんだけど、宗教という言葉の翻訳を通して、南米で、イスラムで、日本で、ドイツで、どういうふうに宗教という概念は翻訳されていくんだろう。そういう議論は非常に豊かにできて、私はおもしろかったんですね。そこに大学の教員もやってくる。ボッフム大の先生も聞きに来る。あるいは、彼らが私に対して反駁をする。

そういう形で議論はできたのですけれども、よくわからないんですけど、日本研究の場合はそうではなかったんですね。そういう話をするのだったら、もう来ないでくれみたいな話になっちゃって、そういうイメージに合わせて演じてほしいみたいな印象があって、非常に戸惑って、同じ大学で何でこんなに違うのかなと、一年間考えていたんですね。

この中で気を悪くする方がいるかもしれないけど、見ていると、結局ドイツの日本学というのは、私の友人のクラウス・アントーニというチュービンゲンの先生が今、本を書いていますが、一九三〇～一九四〇年代ナチの時期に、ある意味で日本とかかわりながら、日独同盟と関係しながら非常に盛んだった。よくも悪くも盛んだった時期があって、戦後非常にドイツ

の中では難しい場所に行ってしまった。これは後で、リュッターマンさんなんか間違っていたら直してもらいたいと思うんですけども。

そういう中で、ドイツにおける日本研究の場所が、ドイツ人自体が非常にマイノリティーで、教授会でもなかなか難しい。どういうふうにみんなに、何で日本を研究しなきゃならないのというのは、アニメが好きな人とかは来るけれど、そこからなかなか超えられないとか、日本語を習いたくて就職したいから来るけど、そこから日本研究に行けないとかいう問題があって、非常に難しい。そういうドイツにおける戦後の日本研究の難しさがあって。

ちょうどその時期、二月頃にアメリカ、アマーストと呼ばれて、ニューヨークランドのアマーストに行つて、知り合いがいるのでハーバードにも行ってきましたけれども、やっぱりそこでも中国研究は、すごく経済的に豊かになっているけれども、日本研究がだめで、もしかしたらライシャワー研究所もビジティングフェローになるためにお金を取ろうかということも今考えているという話を聞いたんですね。そういう中で、ポストドクフェローも減っているし、昔、私が二〇〇三年にライシャワーにいたときは、授業のオブリゲーションはポストドクフェローはありませんでしたけど、今はライシャワーでは授業も審査する。それで、ビジティングフェローの数もおそらく半分ぐらいになっている。で、私の知り合いのアドミスメイトは首を切られてしまった。誰か首を切らなきゃならないということで、人数も減っている。

そういうのはドイツだけではなくて、アメリカでもおそらく起きてきて、どういうふうに日本研究というものを——日本研究をやっている人はお金も欲しいし、交流もしたいから、情報も欲しいから来ると思うんですけど、ドイツの中でとか、アメリカの中で、あるいはイタリアの中でといったときに、日本研究をそれぞれの社会の中でどういうふうに意味立てるかという

ことをすごく戸惑っているような気がするんですね。それが私を呼んだドイツの日本学の先生が、ナチを信じているドイツ人はいないけど日本を信じているという形で、一つは非常に稚拙な形で、これは個人的な問題で、ドイツの日本学そのものの問題ではないと思いますけれども、そういう人が出ちゃうような形になっちゃう。

そういう中で我々は、猪木所長が言われたこと、今まで皆さんが言われたこととちょっと逆の面から今、私は話していると思うんですけど、どういうふうに日本研究をサポートするんだろう、海外の人たちをサポートするんだろうというときに、日本研究に興味がある外国人が日文研に来るということは、そう難しいことではないと思うんですね。我々はお金を出しているわけですから。あるいは提携をやって情報を知りたいというのは、お互いあるわけですけども。

だけれども、彼らがそれぞれの国に帰ったときに、きちんと学問的に尊敬されて、その社会で日本研究をやっている意味がどうしてできるんだろうということまで、我々が支えてあげられるようなビジョンを提供できるような研究交流ができるのか。それとも、あくまでも英語がしゃべれるから、中国語がしゃべれるから、韓国語がしゃべれるからというレベルでやってしまうのか。そこに私は、これからおそらく日文研が世界の中でどのぐらいまでの役割を果たしていけるかというのは、将来としては、私がここで雇ってもらうのには、日文研の存続の問題にもかかわってくるような大きな問題として、そろそろ転換期に来ているんじゃないかな。

日本研究をする、『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』、エズラ・ボーゲルとか、そういう時期だったらよかったと思うんですけどもね。そうじゃない時期にしても、日本研究をしているという枠組みの中に入ってしまったえば、例えば私でも日本の宗教で近代のことを知っているといつて尊敬されることは可能なんですけど、日本を研究していない人であると、彼らにとって

は何の価値もなくなってしまうわけです。でも本当は、日本研究者じゃないから、おまえのことなんか知らないよというムスリムの人とか、インドから来た人とか、あるいはイギリスでカソリックをやっている人たちに対して、私が日本を研究していることは彼らにとってどういう意味があるのかということ翻訳できないと、これからの日本研究の国際化の可能性は苦しくなると思うのです。しかし、その点を乗り越えていかないと、人間的にも学問的にも尊敬し合って、それによって彼らにもビジョンを与えて、私たちもビジョンをもらえるというふうにはならないんじゃないのかと思います。

こういうことは、例えば私は宗教学と日本の歴史学と二つかわっているんですけど、アメリカ宗教学会に行くと、日本人が組むパネルとか、日本研究のパネルは、もうほとんど人が集まらないという状況があって、どうやったら、宗教学あるいはレリジヤスタディーズという枠の中で日本をやる人たちがどうやったら聞いてもらえるのかという非常に難しいところに来てしまっていると思うんです。

そのときにも比較というやり方を導入して、日本の人たちだけではなく、我々は今、韓国の人とか中国の人と、劉さんなんかがやっているようなトランスナショナルな形で議論を組んでいかないと、なかなか関心をもってもらえないでしょう。そういうところに、もしかすると閉鎖的状況の突破口もあるのかなという気はしています。

まとまらない話ですけど、以上です。

荒木 ありがとうございます。非常に参考になりました。また非常に大きな第二、第三の日本研究というものの総体を問うもので、これも後でゆっくり話をしたいと思っています。

続きまして、この中でも比較的赴任が古くて、日本研究ももちろんそうだし、『ニューズ

レター』を通して広く広報活動の発信ということに苦勞されたり、あるいは工夫されたりしているという面もありますので、今度はカーン先生のほうから、何でも結構ですので自分のお考えになるところをお話しいただければと思います。

カーン 皆さんすぐ、磯前先生もかなりシビアなところまで入っていったって、もうちょっと笑い話をしましょう。私の最初の頃の経験からですけれども、こちらに來た当時は交流室の一番最初の年でした。はっきり言って何のこっちゃわからないという状態が自分の周りにあり、つまりいろんな人がいろんなことをする。これが研究協力だ、これが交流だと。そして、いろんなレベル。廊下を歩いていても、こうだと説教されたり、しかもつじつまが合わないんですね、結構矛盾している。実際、どういうふうにどうしたらいいのかと。

ただ、救いになったのは、ある日赴任して少ししたときに、覚えていますけれども、河合先生と一緒に話をしていたんですね。そのとき「仕事はつくっていくもんだよ。つくっていくものだから、いろんな人がいろんなことを言っても、自分から物を考え、自分からやりなさい」と。

当然、もう一人、私にとってかなり助けになったのは園田先生です。創設の最初の準備段階から、今先ほど猪木先生がおっしゃったような概念とか名前とか、そういう結構、時々どうでもいいかなと思うものの中に、実はかなりハードな重要なものがあると。彼はよくお酒を飲む。昔の園田先生との関係を知っている人は、よく私が園田先生とゲストハウスで一晩中飲んでいたので憶えているでしょう。ただの酒飲みと皆さん思っていたかも知れません。そこでは、日文研または海外研究協力というものはどういうようなものなのか、ずっといろいろと議論したり、今でも聞こえますけれども、私が外れたことを言うと、ばかものとかよく頭をたたか

れました。

私もいろいろと失敗をやってきました。最初の海外での日本研究会は、ドイツのボンと、そのときはE A J R Sの開催地にも行くことになっていました。ボン大学で最初は自分の練習というか、ちょっとウォーミングアップみたいな形で行ってこいと言われてました。気楽に、あまりがanganやらなくてもいいからと。

皆さんご存じのように、当時はペーター・パンツァー先生がおられました。パンツァー先生は日文研とよく交流があったので、向こうの師匠という形でいろいろと、ドイツでの日本研究の歴史とか、人とか、どこにどういふところがあるかとか、そういうデータ、情報も教えてもらった。それが終わって、ドイツのドイツ語研究会ですか、ヤバノログンタに行ったんですけど、ドイツ語ができない人間が——ちょっと恥ずかしいのですが、ドイツ系なのにドイツ語が親から少し習った程度でちょっとしかできない。

日本語の用語も出てこない発表って、いっぱいあるんですね。日本語が一切出てこない日本についての発表、つまりローマ字の *edobakuin* とか、そういうのが出てきてもいいのに、全然出てこない。おまけに英語じゃないですから、全部ドイツ語ですから、本当に何で私はここにいるんだろうなと思っただけです。これはおそらく私のために神様が選んだものだったと思うんですけれども。

そのときにちょうど会議が何か、相談会みたいなのがあって、そこに私が入っていったら、隣にリュッターマン先生がいて、これも何らかの縁なのかもわかりません。本人は嫌がっていますけれどもね。

その後、自分が日本人じゃないなというのを思い知らされた事件があった。フランクフル

トから今度はE A J R Sの開かれるポーランドに入らないといけない。ワルシャワに着いたときにパスポートを出したら、ビザがなかった。要するに、私は自分がカナダ人だからどこでもウエルカムと思っていたんですね。そして、追いついてしまいました。日本人はビザなしで大丈夫だったんです。「行くなら、おまえ、ビザを取っておけよ」とか、そういう話です。あれからは絶対に二回、三回チェックしますけれども、あの時はワルシャワから送り返されて、結局大幅にE A J R Sの学会に遅れてしまいました。あの時の私の発表は、あれはたしか図書館の資料紹介で、当時まだ向こうで紹介されていないと言われていたので、ちりめん本についていろいろとお話しました。

そんなこんなで、最初からつまずきながら、だんだんいろいろと見えてきたり、どういうふうに物事をくつつけていけば、どういうところを考えていけないといけないかということを学んでいきました。

海外のシンポジウムは一回の規模が大きい。アメリカ、北米のシンポジウムから、たしかロシアのシンポジウムぐらいまでは、かなりたずさわってきました。日本から先生たちを連れていく、またどういうふうにどんな人を集めてくるか。お互い同じ研究の対象であれば、これは比較的楽ですけれども、意外と日文研とか日本研究となると、話題や分野がものすごく幅広くて、集めてきたのはいいけれども、どういうふうにそこで、いい化学反応、いい有機体とか、いい感じ、いい感じ、媒体とか、そういう場をどうやってつくっていくかというのに、私は努めました。それは日本研究会もそうでしたけれども、どうやっていけば一番いいのかと。それと、ここの業務ですけれども、一度「おまえはカナダ人だから、カナダへ行つてこい」という話もありました。結構安易だなと思いましたが、カナダを横断して、何ヶ所か

な、五、六ヶ所の大学を回ったのですけれども、エドモントン、私の大学がアルバータ大学でエドモントンですし、アルバータ大学に行っているときに、ちょっと親の…。

ありがたい話で、その後、父は他界しましたから、結構元気なときに少しだけ最後居れたんですが、私の親は何も聞かなかったのですけれども、バンクーバーから来ていたおばさんが結構突っ込みのきついおばさんで、「あんた、実際日本で何をやっているの」と。私は日本研究の学科とか、そういうところを回って、そこにいる研究者といろいろと話をして、どんな興味を持っているか調査していると説明しても理解ができない。まさか偵察という言葉はちょっときついで、最終的に友達をつくりに来たんだよと。「同僚の友達をつくりに来たんだよ」と言ったら、不思議とそのおばさんは「ははは、それは、それでわかるわ」と。何がわかったのか知りませんけれども。

まだいろいろとあると思います。『ニューズレター』ですね。『ニューズレター』について少し。白幡先生は、「ニュース」なしで「レター」だけでいいのでは、という考えですが、僕はレターというのもちょうと。この時代にホームページとか、ああいうもののほうがはつきり言って早く行っちゃうんですけれども、やっぱり紙媒体というものの重要性というのがありますから。『ニューズレター』で一番のニュースは、おそらく日文研に來ている海外からの研究者のこと、または所内の専任の先生がされた講演会について、ここに来られなかった人、または世界に自分の読者が本当にどのぐらいいるのか、ちょっとわかりませんけれども、四〇〇〇部ぐらい刷って送りますから、そういう方々に自分の研究とかを少しでもお知らせしたい。アブストラクトにちょっと毛が生えたぐらいの長さで。時々、ある先生はかなり書きますけど、稲賀さん。そういう形で、できるだけみんなにお知らせしようと。紙面の枚数に限りがありますから、

すべての人に当たるといふわけじゃないですけども、それは努めて、ニュースという感じよりもエッセイ的なもので発信している。

わかるんですね、交流とか協力という、自分が誰に書いているかというのを意識して書いている人と、全く無視している人。一方的にある特定の、場合によっては読者とは全く違う人に書いているような感じのエッセイが時々出てくるんですね。そのときはやはり翻訳、バイリンガルで出していますから、日本語で出てきたら英語で、英語で出てきたら日本語で訳しているんですけども、たまにはちょっと、申しわけないんですけども、訳者になったりすることもあります。

今後、『ニューズレター』にしても何にしても、どういうような形になっていくかというのは、いろいろおもしろい展開が出てきたらいいなと思っています。

とりあえずそれでいいかな。

荒木 ありがとうございます。

フロアの先生方にもボールが投げかけられかなり直接的にキャッチボールが始まりかけているんですが、もう少しばらく前のほうで議論をして、フロアに質問なりを持っていきたいと思います。

一回目のお話の最後は佐野先生で、佐野先生は私と同期になるんですけど、研究はもちろんですけども、それ以外に国際交流基金とかユネスコとかで研究を支える仕事についてのご経験もあって、外から見た目と、それから日文研で実際に研究活動をされた目と、両方の視点をお持ちですので、ざっくばらんにご経験や感想をおっしゃっていただければと思います。

佐野 私はちょうどこちらに移らせていただいてから一年たちました。広い意味での国際交流

ということ、交流の中身、現象の面と、それを推進する政策の面の両方から、自分の研究領域としておりますので、私の場合は、日文研の国際交流の業務にかかわることを、煩わしい負担としてではなく、非常に積極的にとらえることができています。日文研の国際交流自体を研究素材にするというわけではないのですが、ただ、そうした経験がいろいろな意味で研究にもそのまま跳ね返ってくるという意味で。

一年こちらで過ごしての感想のような形になってしまいましたが、特に強く感じることを二つだけ、申し上げたいと思います。

一つは、きょうは「国際交流」という枠での座談会ですけれども、その国際交流活動というのが、ちょっと通常の研究とは切り離された、距離のある付加的なこと、わざわざやるものになってしまっているのではないかと思います。日文研の研究活動の本来の性格に根差した、その外延として、もっと自然に国際交流活動があるという感じになっていくと、企画推進していく上でも、実際に全員がかかわっていく上でも、位置づけやすい、やりやすいのではないかなと思うことがよくあります。

もちろんこれは当たり前のことで、わざわざ言うまでもなく、それぞれの研究のごく自然な延長として、国際シンポその他、いろんなことをなさっている先生がたくさんいらっしゃるわけですが、他方でどうも、付加的にわざわざやるものというふうになってしまっている部分もあるのは確かだと思います。その結果として、ここにこれだけ豊かな研究の実質、内実があるにもかかわらず、個々の国際交流事業をつくるのにきゅうきゅうとしてしまったり、あるいは、外からの要望に場当たりに応じていく格好になってしまったり、といったことがあるのではないかと、ごく素朴な感想として思います。

それではどうしていったらいいのか。いろいろ考えられると思いますが、具体的な一例として、今年の夏にエストニアで行われる小さな日本研究会の企画を初めて担当させていただくことになった際に、現在実際に進行中の共同研究会、日文研のコアの活動である共同研究会を現地でそのまま体験していただくようなワークショップをできないかという提案をいたしました。小松先生がそれを引き受けてくださったので、大変ありがたく思っておりますけれども、今回の日本研究会は小松班の番外編として外に行っていたく、——そんな提案をいたしましたのも、今申し上げたような問題意識の一端からです。もちろんほかにもさまざまなやり方があるかと思います。

それから、さっき二つと申しましたけれども、もう一つは「国際交流」というときに、海外に何か持っていく、あるいは海外から新たに招聘して何かやる、ということにとらわれ過ぎではないかということです。それよりも、足元を見て、この日文研の空間にこれだけの国際的な知性が集結しているということをもっと大切にしたいと、常々思います。

それは、さっき山田先生が最初のご発言でおっしゃった「最高の研究機関」ということも重なってくるのですが、もう一步踏み込んで言えば、やはり単に研究機関であるだけではなく居住空間であるということ、そこにこれだけ多彩な外国人研究員の方々が各国からお集まりになって、大げさでなく、人生のある一時期をここで共にしているということ——。そのような知的コミュニティとして、ここにいたことがそれぞれの人生のために大きな役に立ったと、今、本当に言っていただけ状態にあるのかどうか、また、ここで日々、闊達な刺激のやりとりがあったとして、そのような場所としての日文研を外に対してアピールできているのかどうかというところに、非常に大きな問題意識を持ちます。

居住するというのは、本当に住んでいなくても、専任の先生方を含めて広い意味で申し上げているのですが、しかし同時に、実際にこの敷地内に住んでいらっしゃる方々への生活面でのサービスレベルというようなことを含めて、知的居住空間としての日文研をどう考えるかということに、もっとエネルギーを割いてもいいのではないかなと、この一年を経て感じております。とりあえず以上です。

荒木 ありがとうございます。

今の佐野先生の提言を受けるような形で問題をまず議論していききたいのですけれども、先生方、補いの形でも結構ですし、直接的にちょっと意見がおりという方、積極的に手を挙げていただいて、話をしていきたいのですけど、いかがでしょうか。

猪木 磯前さんの話を伺っていて、これも個人的な体験になるわけですけど、だいぶ違った感じを持っていることを基本的には申し上げたい。その中で二つ、日本研究というものに関して持っている私の固定的な思い込みみたいなものを実は解きほぐしてくれた例として話したいんですね。

私は一九九七年と一九九九年にドイツに三ヶ月、短い滞在ですけれども、あちらの学生に日本の明治以降の経済発展についてのレクチャーを一五回ぐらい、二度依頼されて行ったんですけれども、私の印象は、磯前さんがお受けになったのと同じくらい違ふんですね。それはどういうことかという、学生はドイツは大体マスターレベルの学生で、大学に五年ほどいて卒業する。当時はまだボローニャ・プロセスが入っていないときですから、要するに学士というのはなくて、マスターとその後はドクターですよね。そのマスターで自由な力作の何かペーパーを仕上げる。

その間、いろいろなセミナーに招かれたんですけど、私がちょっとおもしろいなと思った点。日本研究というと、何か閉じた日本という島国の中に発生した文化現象みたいなものを取り上げて、これが非常におもしろい、特殊な現象であるというふうなことを研究するという、私は何か固定観念がありました。ところが、私が九〇年代後半に二度目に行ったときに受けた印象は、全くそれとは別で、その中で印象に残っている話が二つあります。

一つは、ドイツのレクラム文庫と岩波文庫の発生とその形の違いを論じた報告を聞きました。これ、おもしろいなと思ったんですね。それはもちろんドイツのほうが残念ながら先ですけれども。つまり文化が、一つの具体的な書物というものが、つまりインフォメーションなり、あるいはもっと知恵の詰まった書物が、国を超えてモデルがコピーされるといふか、そういうときに一体どういふふうな違いを生み出すか、一種の文化変容というか、文化というのは閉じられた中で何かこれが非常に日本に特殊的だというような議論をする、日本学というのはどんな意味があるのかなと、私は正直に申しまして、経済学をやっている感じがいたんですね。けれども、その報告を聞いて、なるほど、これはやっぱりドイツ人がよく自国のことを調べ上げて、そして他国、日本の中で生まれた岩波文庫の研究もして、それを比較するという視点とというのはなかなか、これはやっぱりよほどの学問的投資をしないとできないということですね、おもしろく感じました。

それからもう一つは、これは経済史の報告で印象に残っているのが、戦時下つまり第二次大戦中の女性労働力の動員の問題、それから、女性が家庭で産めよ増やせよでどんどん人口を増やさないといかんという日本の内務省系統の政策とを比較した経済史の報告を別の研究会で聞いたんですね。

私はいろいろな研究発表を聞いて強く感じたのは、やっぱり日本研究自体、私が古く持っていた——日文研というのができたというのは、私は大阪大学におりましたから、もちろん聞いていた。何をするのかな、日本人の研究者とか外国人の研究者を集めて、そういう研究、日本が特殊だ特殊だと議論をしているんじゃないかなという愚かな推測をしていたんですけれども、実際はもうそのとき既に一部ヨーロッパ、アメリカでもそうでしょうけれども、文化の研究とかエリア・スタディーズというものの性格がだいぶ変わってきた時期だったということを実感したわけです。

先ほど劉さんが満州の問題、日中関係、それから若い榎本さんが交渉史をやっておられますけれども、ああいう国と国との間の交渉とか比較の問題とか、そういう形に日本研究が変容しているのだなあということを私が最初に気づいたのが、実はドイツの滞在だったのです。リュッターマンさんがおられるから氣を使って、ドイツのレベルの高さを言っているわけではありません。彼は私に対しても厳しい、嫌なことも言う人なので、あまり支持したくないんですけれども。でも、学問的真理というのは、好き嫌いとか、仲よさとは関係ありませんので。

一つの学問分野というのは固定されたものではなくて、やはり変容を迫られ、そして基本的には自国をよく知る者が他国を研究したときに何を生み出すことができるかということを問われているでしょう。ドイツで私が実感したことをまじえて、磯前さんに対するマイナーコメントとして申し上げます。

荒木 磯前先生、いかがですか。

磯前 それでいいです。

荒木 話が劉先生にも来ましたけれども、いかがでしょうか。

劉 先生の最後のお話ですけれども、研究者はもちろんそれぞれ自分の専門を持っているわけですが、しかしその専門内だけではなかなか解決できない課題もいっぱいあって、どうしてもその研究対象の全体像、つまり日本文化の構造全体をある程度把握しなければ理解しにくいことが多々存在します。特に外国人研究者の場合はその傾向が一段と強くなります。私自身もそれを経験しています。先ほども申し上げましたように、私は、最初の協力される側から、その後の協力する側へ、という身分転換があったわけです。協力される側の立場に立っていた時、何を一番悩んでいたかと言えば、やはり日本文化の特質をどうつかむか、その全体構造をどう理解するかということだったのです。そして、その解決策は、私にとってつまり母国の中国文化との比較でした。

私は一九九〇年に神戸大学を出て、天津の南開大学に就職しましたが、その外国語学院の日本文学学科で日本文学を教えていたんですね。しかし当初、いくら日本文学はこうだ、明治文学はこうだと言っても、学生たちがみんなキョトンとしていて、ああそうですかという感じで、まったく通じませんでした。そこで、彼らのよく知っている中国の作家や作品を例に挙げ、それと比較しながら説明するととても関心を示してくれて、またすこしずつ分かってくれるようになったのです。つまり、日本文学オンリーでは、どう教えてもなかなか理解してくれず、彼らの一番身近なものを持ってきて、実は両者がこう似ていて、またこう違うんだとやったら、わりあいスムーズにこちらの話に付いてきます。まさにこの南開大学での経験から私がその後だんだん元の日本文学の専門から日中比較文学、比較文化へと「転向」したわけです。

そして、これについては、やはりかつて李御寧先生がおっしゃっていたように、とりわけ中国や韓国との比較が非常に大事だと思います。つまり日本とヨーロッパの国々だけを比べる

と、もともとアジア共通のものも日本の特質として立ち上げられてしまうので、ヨーロッパの国々や南米、北米の国々と比較すると同時に、一番文化的に近い、類似性の多い中国や韓国と比べることによって、より日本の特質、本質が分かってくると思います。

他文化との比較がとても大事だというお話しでしたので、私の体験として簡単に補足させて頂きました。

荒木 ありがとうございます。

今のは研究協力という、いわば外側に見える問題が、実は非常に本質的に日本研究に作用してくるということ、それから、日本研究の総体というのとは何かという問いかけでもあったように思うのですけれども、どうでしょうか。何かそれに絡んでもよろしいですし、もう少し述べておきたいということがあれば、ぜひお話しいただきたいのですが、まずステージの先生方。

山田 これは、もうここ何年か感じていることですけれども、国際日本文化研究センターという名称を持ち、日本という国家を一つの研究の単位としていますよね。私のように東アジア圏での大衆文化の交流などに関心がある立場からすると、時々、日本という縛りがちょっと邪魔になってしまっているんです。この研究所については、先ほど磯前先生がおっしゃったように、よくも悪くも『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』の時代に構想され、つくられてきた研究所であるわけです。

ご存じのように、もっとも『ジャパン・アズ・ナンバー・ワン』といっても、実際は二位だったわけですが、今年、GDPで三位になりましたよね。もちろん経済が国力のすべてだとは思いませんけれども、その国の関心への度合いというのは、やはり経済力に否応なく比例してしまっているわけです。

これから先どうなるかということを考えると非常に暗いものがありまして、ちょっと実は数字を持っているのですけれども、二〇二五年、今から一五年後のGDPは、数字で言うと、アメリカが二〇兆ドル、中国がそれに匹敵する一八兆ドル、日本が大体その三分の一ぐらいの五兆六〇〇〇億、こういう差になってきます。もつと言うと、さらに二〇五〇年には、中国が世界でただ一つのスーパーパワーになる七一兆ドル、アメリカがその約半分ぐらいの三九兆ドル、以下、インド三七兆ドル、ブラジル、メキシコ、ロシア、インドネシアと来まして、日本が八位という予想です。つまり、我々はこれから先、経済的な意味では三位の位置から八位に転がり落ちていく時代の日本研究のあり方を構想していかなきやいけないという非常に難しい状況なんですね。

そういう前提に立って考えると、どこまで日本という縛りを逃れるか、あるいはそれをもつと有効に活用していくのかという問題になってくるのかと思います。それがどういふ分野のスタッフをそろえるかということにもかかわってくるかと思うのですけれども、特に社会科学系なんかは、あまり日本という縛りに関係ないという方が多いと思いますから、やはり現に今の日文研のスタッフで社会科学者は所長しかいませんでし——戸部先生、社会学者ですか。失礼いたしました。

でも、社会学者はいなくなつて久しいですよ。グローバル化なんていう言葉があるけれども、それは使いたくないですけれども、そういう中で日本研究のあり方が問われている中で、国家を単位とする発想がなじみにくい分野の人が集まりにくくなつていないでしょうか。かといって、海外での日本研究の需要が世界的にみて急速に低くなっているわけでもない。ただ、長期的に見れば、やっぱり低くなつていくだろうという中で、これは簡単に答えが出るこ

とではないんですけれども、今年二位から三位に転げ落ちたのを機会に、この研究所のあり方そのものを考え直すにはいいタイミングではないかなあというふうに思います。

猪木 この研究所に経済学をやっている人間がいることの意味を今、自分で確認いたしました。ご存じの方もおられると思いますけれども、私は、この研究所は将来的にヒューマニティーの研究所として成長するのが望ましいと思ったのですが、今の山田さんのご発言を聞いて、やっぱり経済学も要ると。ということは、今、数字上、中国が強大な、ばかでない国になるというふうな推計を今、どこかのデータか、私はちょっと知りませんがお話をされた。二〇年間二桁で経済成長をした国というのは、実はこの地球上にデータがある限り存在しないんですよ。中国が一人っ子政策をし、人口も縮むだろうし、私は中国はこれから少ししほむんじやないかと推測しています。中国は中国統計年鑑がありますけれども、あの統計年鑑の数字を使って単純に統計的に推計するということはできないと思うんです。ごく直感的に人口構成等を考えていき、そして過去の例を考えると、今、山田先生がベースにされた数字は、やっぱりちょっとおかしいですよということ。

山田 実は私、かつて経済学を勉強したことがありまして、いかに経済学があてにならないかということとはよく知っているんですけども、所長のおっしゃることも種々ある予測の一つということではないでしょうか。

荒木 ちょっと手が挙がりましたので。

鈴木 中身じゃなくて、別のデータを挙げますと、今、国際交流基金が日本語の検定試験をやっていますよね。受験者数だけ言うと、この二〇年間、五年ごとに倍増しています。まだ二〇一〇年の統計が出ていないのだけど、世界でほぼ一〇〇万人です。日本語の検定試験を受

けるほど熱心な人のその伸びが、五年ごとに倍増してきているのです。むしろ、パブルがはじけた後、これを支えているのは漫画とアニメの力なんです。こういうデータもあるわけです。そして、ジャパン・クルールのブーム。そのことを対象にして考えないとうるぎないでしょう。国際交流のなかで、この現象をどう見るか。

荒木 わかりました。どうでしょうか。例えば今、ポップカルチャーの話もちょっと出ましたけれども。

山田 数字はやっぱからくりがあるものでして、それがどういう……。たぶん調査対象が増えてくるんじゃないかと思うんですけれども。同じ対象に対しての調査であれば問題ないのですが。**鈴木** 検定試験の受験者の絶対人数ですよ。地域も回数も増えています。日本語学習者でいえば、中国だけで百万という人もいます。山田さんの言うのと、違うデータもありますよと言っているだけ。

細川 経済発展と関心は比例しているという山田の法則ですが、それもやはりかなり今、まゆつばなんです。経済的にはもっと小さな例えばフランス、イタリア、例えばイタリアの経済は何位だか知りませんが、それにもかかわらず日本ではイタリアのことをやって、フランス文学をやる人が増えているんです。サッカーとファッションと何かとか。

同じようなことで、日本は漫画とアニメさまざま、そのおかげで、一〇〇万人だか何かに増えている。経済というのは、私たちでどうやっても経済が急にひっくり返るわけではないので、結局のところ、いい研究者をどんどんつくってという、ばかみたいな話ですけども、ヒューマニティーとソーシャルサイエンスというのはあまり関係ないんじゃないか。やっぱりいい研究があると、例えば磯前さんなり何なりのやっていることがイスラムの人に訴えかけ

て、そういう人がここに来て、英文だけで、フランス語と英語だけで神道を勉強するというようなことがもともと増えてくれば、違う形でいろんな交流、ネットワークができてくると思うので。もちろん、経済が予算とかを縛ることはもちろん認めます。

山田 まさに細川先生のおっしゃったとおり、今、フランス、イギリス、イタリアあたりがたぶん、今の順序で言うところの七位、八位ぐらいのところに来ると思うんですよ。そういう国々のことが、例えば今、日本でどういう研究されている、どういう関心を持たれて、どういうふうな研究をされているのか、あるいは世界でどう研究されているのかということ自体を研究することも、ひょっとしたら将来の日本研究を構想していく上では重要な点というふうに思っております。

劉 一言だけです。中国で村上春樹を除いて一番売れている日本人作家は誰だと思いますか。そうです、渡辺淳一ですよ。そういうソフトウェアも日本にありますからね。そういう意味では行く末をとっても楽観的に考えております。

特に渡辺は今もう村上を超える勢いですね。去年、複数の出版社が彼の著作を全部無断で翻訳してしまった事件がありました。本人がたいへん困惑して、それらの出版社を相手に上海で訴訟まで起こしているんです。それだけ彼の人気がすさまじい。ですので、日本はまだまだいくらでも輸出できる文化を持っていると思います。

荒木 渡辺淳一ですか。私の評価は『無影燈』ぐらいまでで止まっているんですけども（笑）。それでは、いろいろ議論が展開してきましたし、そろそろフロアのほうの先生方にも一言言いたいという方もかなりおられると思います。

先ほどの研究協力ということで言いますと、現在、客員でこちらに滞在している外国人研究

者の方々も要望とか意見があると思うので、話題を限定せずに、それからステージの先生方も遠慮なく、ちょっと手を挙げていただいて発言をしていただきたいのですけれども、いかがでしょうか。

白幡 国際交流が、日本研究にどのような影響をもつかが議論されているようですが、僕はあまりそういう考えを持たなかった。日文研の任務は何を創造できるかとか、これまでなかったような研究とか、各自がやりたい研究がやりやすい環境さえつくれば、各人がそれを利用して奔放に研究を進めてその総和が日文研になればいい。私はそういう考えだったので、これから没落するか、発展するかが問題ではなくて、私だけではないですが、自分としてやって大変おもしろかったという研究をどう積み重ねていくかなんです。

それで、国際交流と研究との関係についてオランダでやった国際シンポジウムの話をした。これは早川さんも一緒に行ってもらったんですけど、そのときのテーマが「一八世紀の日本とオランダを比較する」という、簡単に言うとそのようなテーマで。それで、例えば出版について、オランダの一八世紀の出版と日本の出版の比較をやる、それからオランダの医学と日本の医学、つまり蘭学といつて日本に西洋の学問が随分入っていましたけれども、本当にオランダの医学は当時どういう状況でどんな水準にあり、日本の蘭学は何を取り入れたのかという研究をつき合わせるとか、日本側とオランダ側の研究者を一人ずつ対比させて発表してもらい、それをテーマに全員で討論することをやったんですね。

早川さんに分担していただいたのは性的な問題、セクシュアリティのセクションでした。一番ショックだったのは、向こうに春画に対応するようなテーマを求めたら、返事はボルノグラフィーの専門家はいると。性的な問題をいろんな角度から論じたいと考えたセクションがボ

ルノグラフィター批判のセッションになってしまった。文化の問題なんていう視点はなくて女性が被害者になった良からぬ風習で片付けられてしまう。とにかく衛生問題とか、人類の何ていうのかな、否定すべき側面として見て、性描写なんてものは文化としてとらえるなんてとんでもない風だったですね。早川さんがまた例の調子で——おられますか。明るく明るく春画の読みのおもしろさとすばらしさを述べたのですが、全然反応がない。そこでこっちとしてはますます情熱を込めて議論したんですけども。

つまり、性的なものは、女性の強いられた商売として、要するに春画を理解するのに、すべて、何というのかな、何か対策、例えば性病の予防とか、そういう関心からだと言学者はいるんだけど、あれを例えば家族と一緒に見るような絵であるとか、人間性の奥の表現であるとかいう早川さんの説、それは全く理解されない。春画が西洋にあったかなかったについてすら答えが返ってこない。本当になかったのか。オランダの一八世紀に春画というようなものがなかったのかというのは、今後の我々の課題だなあとはいって帰ってきたんですけども。その後、早川さんはユニークな研究を続けておられますけれども、国際的な総合研究といえるようなものは特にやれていないと思います。

我々は日本にあるこういうものは世界中にもあるだろうと思いがちです。春画はあるかもしれませんが、意外に世界にないというものがある。世界にないというのを証明するのは大変難しいんです。というようなことをあれこれ考えると、やっぱりこういう研究はおもしろいかなと思っただけで、熱心にやっつて、そうした結果が積み重なって新しい見方が広がったり、さらにそういう研究は必要あるのかなというように批判的議論も巻き起こって、そういう中で日本研究あるいは日本文化研究が育っていく、でき上がっていくというのがおもしろい、いい姿ではな

いかなと私は思っています。ぜひ国際交流というのはそういうことを気づかせてくれる大事な場所だというふうな思いで、あまり悩まずに続けたい。

荒木 ありがとうございます。

さつき手が挙がりました、井上先生。

井上 僕らにどういうサービスができるかという話があったので、あえて申し上げたいと思います。

私は若い頃に、日本の宮型霊柩車というテーマに興味を持ちました。でも、これがテーマとしておもしろいということを教えてくれたのはスイスからの留学生でした。宮型霊柩車を見かけたスイス人が、あれは何やと、誰の乗る車やと聞いたのが私の想像を刺激したのです。

ここに初期、グラント・グッドマン先生という方がいらっしゃいました。グッドマン先生は、ケンタッキーフライドチキンの店に立っているカーネルサンダースの人形を見て感動していらっしゃいました。「日本人はおもしろいもん、こしらえるな」。私はグッドマン先生に「えっ、アメリカにはないんですか」と聞いたら、「あんなもん、ないですよ」と。そこから私は人形という研究テーマをもらいました。

我々がサービスするだけではないと思います。我々だっていろんなヒントをもらっていると思います。そんな霊柩車とか人形の研究は学会では尊敬されないかもしれませんが、私は別にあんまり尊敬されたいとも思っていないので、磯前さんほどには不安を抱いていないんです。別にそんなん、日本研究で尊敬なんかされんでもかまへんやんか。大体学会で尊敬されたがるという人がいやらしいのと違うかな。

話を戻しますが、実は私なんか以上に、白幡さんの花見の研究なんか、ほんまにここのおか

げでできたような研究ですよ。ここに来てはる客員の先生に、「あなたの国に花見のようなものはありますか」と聞きまくって、それで一冊こしらえているんですから、白幡さん、まずそれを告白すべきやで。

だから、ごめんなさい。一方的に我々にどんなサービスが可能かという話ばかりしてたんだけど、我々自身が大いに肥やしにさせてもらっているということを、ぜひ、二五年史を書きとめるエトレの方々に把握しておいてほしいと思って、ついつい手を挙げてしまいました。

荒木 ありがとうございます。では、宇野先生。

宇野 皆さんのすごい体験を大変興味深く聞かせていただいたのですが、私は比較的新人なので、外から見た日文研がどうだったかということ。私は、日文研に九九年に赴任する前に、二つの共同研究に参加させていただいていまして、一つは石井紫郎さん、赤澤威さんの「武器の進化」であり、山へ行って木を集めてきて、弓をつくって、矢じりをつくって、さらに三田ヘイノシシの皮を買いに行きました。それを弓矢で射て、どれだけ突き刺さるかというような研究であります。

もう一つは、千田稔先生のもう少し格調の高い「東アジア交流」であり、どこに日本研究があるんだ、一体どこに日本の縛りがあるんだというようなことが、私には到底わかりませんでした。日本がちょっと入っていたら十分なのかと思いました。

それから、私が理解できなかったのは、国際日本文化研究センターという名前だったんです、そのとき。英語を見ると、「国際」は「研究センター」にかかっているというふうに読み取れるんですけど、日本語だと到底そういうふうには読み取れない。当たっているかどうか分からないですけど、これはやっぱりネーミングした人の戦略みたいなものがあったって、日本の

縛りのようなことはなく、国際的な研究をして、ちょっとでも日本と関係があれば何でも日本研究だというような、戦略があったような気がします。私は、それが国際協力を進めていくときの日本研究として、非常に利点があるのではないかなというふうに感じています。

私個人は、日本列島の研究というのは、考えただけでもしんどいという感じなので、日文研に来てからシルクロードを主なテーマにしてみました。シルクロードといっても本当は日本なんてほとんどない研究をしているケースが多いので、とにかく建前としては日本も関係しているということです。フィールド調査が多いので、海外で日本隊だけで仕事できることはありますが、必ず現地の研究者と一緒にフィールドで調査をして、いろんなノウハウをやりとりします。これなんかは、私ができる一番の国際協力です。それぞれの皆さんが、それぞれの学問の質というかお立場でいろんな形で、好きなことをしたら国際協力になるというのが一番いいのではないかなと、私は赴任のときに考えて、今振り返っても、あんまり間違ってたかっと思っております。

以上です。

荒木 ありがとうございます。

私の振り方もあって、今、どちらかといえますと、パネリストの先生方からは割とシステムやセンターというあり方についての問いかけが多かったような印象があるのですが、フロアのほうからは、むしろ個人のパーソナルな研究の総和が要するにセンターを大きくして活発にさせるんだという、ちょうど対立じゃないですけど、おもしろい議論になってきていると思います。ここでぜひ外国人の研究者としていらっしゃっている側から見て、研究協力について今幾つか意見が出ましたけど、どんなふうに映っているのでしょうか。あるいはこうしたほうがいい

いとか、お考えがあるうかと思えます。さっき、居住空間としての日文研という話がありましたが、いかがでしょうか。何かありませんか。徐さん、お願いします。

徐 韓国から来た徐です。私は今回のセミナー、シンポとは違う、ほかの委員会でたまたまお話をしてくださいということ一回お話しましたので、それと重なることはちょっと除いて、今回のきょうのこの木曜セミナーのテーマが「国際交流」ということでですけど、今までのパネリスト、またフロアの先生方のお話を聞くと、どうしても国際交流というのを、皆さんが海外に行つて、シンポとか学会をやるとか、または海外から研究者を招いて、こっちでシンポとかをやる。それだけを想定しているようで、本当は私たちのように、こっちに来ている外国人研究者との交流、これも国際交流に入るのではないかなということを感じました。

さっき、知的コミュニティというような話が出ていたんですけど、自分のような外国人研究員という立場は何なのかと思って、さっき出た日文研の二つの軸、一つは共同研究、もう一つはいわゆる研究協力だけど、じゃあ、私はどっちかと。もちろん共同研究にもオブザーバーとしては入れるんだけど、そこでは、ただのオブザーバーだし、それは継続できるということではないので、本当に、こっちに来ている外国人研究員との交流とか、それがいいのかどうかということです。

もう一つは、もちろん外国人研究員は日文研に来て、いろんな資料が見られる。日文研は研究所としてすごく幅広い、またかなり充実した資料を持っていると思います。

今回、私は日文研フォーラムでお話するとき、いろんなこと、個人的に今までやってきたことと違う分野の資料を探してみたら、ほとんど日文研は持っていて、それでびっくりしたんですけど。でも、資料というのは、一つは物的な、物質的なものもあるし、もう一つは人、人

間、人的なものも資料の中に入っていると思います。

そこでさっきの共同研究会、または国際交流、または知的コミュニティともかわるんですけど、私はといたら、東京のほうで留学していたので、関西のほうには、そのような人的なコミュニティとかネットワークは全然ないんですね。研究会はあるとは思うんだけど、その中に入るというのがなかなか難しいんです。そうなると、どうしても人的な資料としては、日文研の中の先生方に頼らざるを得ない。そういうことで、そのような面ではちょっと、やっぱり、コミュニケーションとか知的な交流ということが足りないかなということを感じました。

それともう一つは、これは人それぞれの研究の進め方があると思うんですけど、私はちょっと怠け者で、何か機会がないと、例えば発表してくださいとか、お話ししてくださいとか、そんなことがないとなかなか進まないんです。だから、基本的には外国人研究員をお招きして、自由に研究をなさってくださいということとは、ある意味では非常に、これは本当にすばらしい研究状況かもしれないんですけど、何も制限がないということは、逆にほったらかしということで、私のように怠け者では研究は進まないという、そのようなことがあって、ある程度は制限みたいな、場合によってはこれをやってくださいというような、ちょっと強制的な何かないと、なかなか研究ということが進んでいかないんだなということを感じました。

荒木 ありがとうございます。

かなり具体的な投げかけがありましたけれども、先生方、何か今のことについて、いや、そうじゃないよということも含めて、もしあれば。いかがでしょうか。

細川 今、義務がない、義務を何か仕事をつくってくれというお声でしたけれども、本当はあるんですよ。あと、逆にそういうものは、日文研に来ている雑務が多過ぎる。いろいろ委員会

なり、フォーラムなり、発表なりが多過ぎるから、もっと減らしてくれと。静かにまとまった大著を書いているというような方もいて、なかなか、やっぱりカウンタートパートがそういう人格を見極めつつ協力するしか、たぶんないと思うんですね、だと思います。

劉 ほぼ同意見ですけれども、私も今まで十数年間カウンタートパートをやってきましたが、本当にさまざまなケースがあります。ぜひ何かやらせてほしいという方もいるし、まったくほっといてほしいという方もいる。それを束ねて、我々のほうから何かルールを作るとするのはちょっと難しいかと思います。

ただ、あえてこちら側から一つ申し上げますと、やはりせっかく来て頂いたので、ぜひここを拠点に日本の各学会にどんどん出てもらうのが望ましいと思います。例えば私の場合は一時に数人を受け入れる場合もありますので、とてもじゃないですが、その全員に逐一付き合ったら時間が足りません。ですので、こちらも協力するが、やはり本人が日本の学会なり、研究者のネットワークなりの中に入って、自らいろいろ交流して頂くみたいへん助かります。ただ、これはその人の性格とか、所属分野でのポジションとか、いろいろ微妙な問題も絡んでいて、ここで活躍したい人もいるし、静かに仕事をしたい人もいるので、ちょっと一様にはなかなか対応しにくいかと思います。

荒木 まさに今、徐先生、細川先生、劉先生おっしゃったそれぞれが当たっていることです。で、うまくまとめられませんが、日文研というのはダイバーシティ、多様性が面白い研究所で、それぞれの先生がそれぞれ才能を発揮しておられているという大前提に立脚しつつ、先ほどからあるように、いろんな社会情勢とか世界情勢とかで、センターとしての何らかの対応や改革が必要な面もあるようにも思います。あるいはまた、もっと個人が相互にポテン

シャルを上げていけば、それはそれで解決してしまうような局面もある。もうちょっと結論は先になるとは思うんですけど、私などは、さっきも言ったように、日文研ビギナーとして聞いていて、今日の話題はいずれもだいぶん参考になりました。さてどうなるか、一〇年後の私を見ていただくということで（笑）、それでは時間が来ましたので、最後に所長にきれいにまとめていただいて、懇親会へと場を移したいと思います。よろしくお願いいたします。

猪木 私は先ほど冒頭で申し上げた研究協力というのを一つの柱としたという発想自体を評価しました。これは附帯的なもの、なかなか中心的なものになり得ない厄介な仕事だというふうに、今までの学術交流では考えられていたと思うんですね。私は大阪大学に長くおりましたけど、寄付講座なんかは外国の先生が来られて、さっきの徐先生の話と関連するのですけれども、とにかく干渉せんといってくれと。研究室でほんとは寝泊まりしちゃいけないんだけど、サボート体制をどうするかということで、山田先生は先ほど器用に要求に応えられないということとを非常に心配しておられて、それがよい研究機関になり得ないというふうに論理的に結びつけられたんだけど、私はそうじゃないというふうに思います。我々はもういくらでも、こうやりたい、こうしてほしいというものはたくさんあるわけですよ。だけど、先ほどの冒頭で申し上げたように、研究協力という活動の原点にもう一度戻るとか、それから研究自体の姿勢みたいなものは、やっぱりこれは分野ごとにスタイルが違うし、メソッドロジーも違うから、これは一般化できない。ひとつ確かなことは、好きな研究をやれば一番いいということ。これは本当にそうだと思います。研究面において自由にやりたいことができるような環境を整えるというのは、私は所長としての仕事だというふうに思いますから。枝葉末節という言い方をする

とよくないと思うんですけど、幹の部分はとにかく忘れないようにということです。

最後にエピソードを一つ申しますと、先週、白幡さんと新潟大学の錦先生とベトナムに五日ばかり行ってきました。そのときに大学での講演会の控室でカザフスタンの女性研究者と偶然会話をすることができました。彼女はベトナムの方ですけども、ロシアでロシア語を勉強してロシアで教育を受け、そしてある時点から日本語のほうにシフトして、現在は日本語を教えておられたんですけども、久々に日本研究に戻ってきたと、見事な日本語を話していました。

そのときに会話の中で、私はその彼女のキャリアをいろいろ聞いて関心があつたんですけども、一緒にいた白幡さんが「カザフスタンに花見はありますか」と聞かれたのです。そうしたら、「ない」と言われた。そのときの白幡さんの興奮が伝わってきました。白幡さんは興奮すると目が団十郎みたいに飛び出します。「やっぱりそうですか」と満足気に言って。それで彼は一日、何かもう非常に機嫌がよかつたんです。

それを最後のエピソードにして、これ以上申し上げることはありません。

荒木 ありがとうございます。

では、瀧井先生にお返しします。

瀧井 談論風発で、私、木曜セミナーの世話役を今年もやることになりましたけれども、私が理想と考えているような木曜セミナーでした。

ただ、個人的にはちょっと寂しかったといえますか、というのは、先ほど社会学者は所長しかないと言って、いや、そんなことはない、戸部先生もいるとか言って、ついに私の名前は挙がらなかった。私の立ち位置がよくわかった、そういうセミナーでもありました。皆さん、どうもご苦勞さまでした。ありがとうございます。

パネリスト

磯前順一（国際日本文化研究センター准教授）

猪木武徳（国際日本文化研究センター所長）

テモテ・カーン（国際日本文化研究センター助教）

佐野真由子（国際日本文化研究センター准教授）

細川周平（国際日本文化研究センター教授）

山田奨治（国際日本文化研究センター教授）

劉建輝（国際日本文化研究センター准教授）

司会

荒木浩（国際日本文化研究センター教授）

フロアーからの発言者

井上章一（国際日本文化研究センター教授）

宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授）

白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）

鈴木貞美（国際日本文化研究センター教授）

徐載坤（韓国外語大学校副教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）